

分科会報告

【乳幼児期】

参加者…学校教員、大学院生、研究者 計6名

少人数のアットホームな雰囲気が漂う分科会となりました。一人一人の発言、意見にみんながうなずきながら、会が進められました。現在早期教育、教育相談、幼稚部を担当している教員、現在は担当していないが、過去に担当経験のある教員など、それぞれの立場からの情報交換、意見交換が行われました。乳幼児期の教育については、まだまだ確立しておらず、実践面での情報を蓄積することが大切であると思われました。分科会では、以下の2点を中心に話し合われました。

(1)他機関との連携

“盲ろう”という障害に関する医療的情報、“盲ろう”という稀少障害がもたらす福祉に関わる情報、研究知見について情報を共有することが大切です。その上で、療育センターなどの療育機関、また盲学校、聾学校、さらには養護学校という障害種別の異なる学校間の情報交換・協力体制など、関係機関との密接な連携が求められるとの意見が出されました。

こうした関係諸機関との連携によって、早期教育・教育相談・幼稚部という学校教育のスタートラインにたつ子どもや保護者に対して十分かつ適切な情報を提供することが可能になります。そのためにも、子ども達、保護者達と向き合う教員や関係職員が、医療や福祉に関する多くの有効な情報を保有することが大切であると話し合われました。

また、連携を考える際には、校外の諸機関との連携だけを意識するのではなく、校内の学部を超えた連携も重要であり、これらを視野に入れて考えていくべきではないかとの指摘も出されました。

(2)コミュニケーション

盲ろう乳幼児と家族にとって、コミュニケーションの基盤を築くことは大きな意味を持つものです。子どもとのコミュニケーションを考える場合、子どもからのサインをどう受けとめるか、そして私達からのサインをどう子どもに伝えるのか、といった発信・受信の両側面から考える必要性が出されました。

また、コミュニケーションの手段や方法を子どもに押しつけることなく、私達は「何を」子ども達に伝えようとしているのか、という伝えるべき中身そのものを吟味する姿勢が大切なのではないかと、この意見が出されました。

乳幼児期のコミュニケーションの具体的な方策について、議論は深まりませんでした。その後、待ちかまえている就学問題、さらにはその子どもの生涯に渡って大きな影響をもたらす学校教育のスタートとして、とても重要な問題です。コミュニケーションは、発達軸でおさえつつ、各学校での具体的な実践を共有しながら考えていくべきテーマだと感じました。

(文責:原田 公人、三科 聡子)

【学齢期】

参加者…学校教員、盲ろう児・者の家族、学生 19名

自己紹介、盲ろう児者との関係、現在の課題等について情報交換を行い、その後、感情・場の空気、共感、子ども同士のコミュニケーション、高校の3年間で培うこと等をテーマに話し合われました。分科会で協議された内容を4つの項目にまとめて報告いたします。

(1)感情を伝え合う

嬉しい、悲しい、寂しい、悔しい、嫌、恥ずかしい、美しい、ちょっと…等の心を育てたい。初期には子どもの感情に名前を付け、周囲の感じ方を伝え、心揺さぶる体験を共有する。喜怒哀楽を伝える一つの方法は、口・顎・頬の筋肉の動きを触ってもらい、笑う・怒る表情等を伝えることである。米国の盲ろう者は、コミュニケーション中ずっと顔に触り合い、感情豊に語り合う文化がある。身体の動きや表情をどう伝えるか=心をどう伝えるかは教育の課題である。たくさん顔を触らせ、豊かな感情を育てよう。

(2)場の空気を読む、共感する

相手の立場に立てない、場の雰囲気を読めない、人との距離感の取り方がへた等といわれる。その状況で、自分の発言や行動に対する相手の表情変化、語調・語気、ざわめき等の非言語的な情報が不足しており、自然には身に付かない。相手の気持ちを付け加えて通訳すること、失礼や不謹慎の意味を伝えること、相手の頑張りを伝えること、色々な人がその場において泣いている人もいること、人に誤解を与える言い回しや言葉遣いを正すことなどが話された。発達段階に応じたよりよい社会参加を目指して、自然に身に付かない人間関係の機微を丁寧に育てたい。

(3)子ども同士のコミュニケーション

盲ろう児とクラスの友達のコミュニケーションを成立させるには、配慮した集団構成が大切である。友達を作り、身振りサインや指文字・指点字などができる友達を育てていく。重複の子に友達を作ろう。ある程度コミュニケーションが進んでくるとしどろもどろの相手を拒否する場合があります、会話・通訳レベルをどう指導するかは課題である。

(4)高校3年間コミュニケーション以外に何をしたらよいか

学校を卒業する時に完成するものではない。慌てず、表層だけの手段や方法の習得に走らないようにし、自身を窮屈にしないこと。自分のやりたいことの力をつけること。人と関わることは楽しく、人に伝えることは自分の役に立つ。人との関わりが3年間の仕事である。アフターケアも含めて進路を考えていく。

(文責:星野 勉)

【成人期】

参加者・・・盲ろう児・者の家族、施設・作業所等職員、学校教員、職業・リハ関連センター、行政関係
計15名

はじめに、事前アンケートで‘話し合いたい内容’として挙げられたことについて、それを書かれた家族の方から具体的に話していただきました。それは、学校を卒業後、どんな進路選択があるのか、新しい社会に出てコミュニケーションをどのようにとっていくのか心配であると言う内容でした。他の家族の方からも、思春期の不安や、楽しく生活して欲しいこと、自分の要求を伝えられるようになって欲しいこと、人との関わりをもっと豊かにして欲しいこと、施設に入ってもその豊かな関わりを続けて欲しいと言う声がありました。また、施設に期待したいこととしては、個性を大事にして対応して欲しい、開放的で親も気軽に出入りでき、お互いに状況が分かるようにして欲しいという話が出されました。

施設の方からは以下のようなお話がありました。施設入所や通所するとき、障害が重いと手がかかるのではと心配する親御さんや先生が多いが、ご本人の健康や個性を第一に考えて欲しい。施設利用料を支払っていただいているのだから、言いたいことは伝えて欲しい。そして、入所後親御さんには楽になってほしい。お子さんに、会いたいときに会いに来て、泊まってもいいし、外泊してもいい。親御さんも自分の時間を持ち、自立の一步を考えて欲しい。また、学校を卒業後できるだけ地域で暮らしていけるように考えて欲しいというお話もありました。入所すると、社会との関わりが減ってしまうので、色々な支援を受けながらできるだけ地域で生活し、困難になった場合に入所を考えて欲しいという要望でした。

作業所の方からは、家族の方が不安に感じていることについて、今後一緒に考えていきたいとお話がありました。盲ろうの方が利用しやすい作業所として、どのようにやっていけば良いかを考え、必要な支援を行政にも働きかけていきたいと、今後の展望を語っていただきました。

リハ関連の方からは、盲ろう者が40代～50代になり、家族の方の支援を受けられない状況で錯乱し、入所できる施設がなくて精神病院に入院している例も報告されました。

最後に障害者自立支援法については、理念は良いが社会資源がない状態でどうなるのか不透明であること、施設は今後大きく変わることが予想され、家族も教員も注意深く動向を見守る必要のあることが述べられました。

全体的に、参加者一人ひとりがそれぞれ活動する中で、今後どのようにやっていくのかを考えながらお話をすすめることができたのではないかと思います。そして、分科会を通して参加者が実感したことは、まさに基調講演の内容と結びつくものでした。「その人の個性を大切にしたい」「盲ろうの人と一緒にいること・一緒に過ごすことを大切にしたい」「盲ろうの人を理解したい」「同じ人間として向き合いたい」。これらのことをお互いに確認しあい、分科会を閉じました。

(文責:西村 晴美・柴崎 美穂)

【盲ろう児者を初めて担当したあなたへ】

参加者・・・学校教員、児童福祉センター、研究者 計10名

担当している幼児児童生徒の盲ろうの障害原因は、CHARGE症候群、先天性風疹症候群、低体重出産、不明等で、年齢の範囲は、2歳から高等部生徒までと幅が広く、一人ずつ担当している盲ろう児の様子と現在の課題を紹介し、参加者がともに意見を出し合い、それら課題へ取り組む手がかりを探っていきました。

(1)生活リズム、昼夜逆転の課題: 1)睡眠リズムをつけたいが、連続して不眠で登校したり、神経も高ぶっていることもあり、どう接すべきか迷う; 2)昼夜逆転、生活リズムが整わない児童への対応は; 3)幼い盲ろう児の生活リズムのつくり方。

以下の意見が出された: 盲ろう、特に視覚障害が重度の場合に昼夜逆転は容易になる。少しでも光覚があれば、朝および日中、できるだけ光に当てること重要; 思春期以降、体調全体が不安定で困難な場合がある; 基本的に、食事、入浴、日中のルーチン等がリズムをつくりやすい; 家庭全体に影響あり、投薬も候補として考えられる等。

(2)排便の課題: 1)夜中の排便がある; 2)夜中に便を周囲に塗る行動がある。

出された意見: 昼夜のリズムづくり同様、食事等の生活のルーチンが重要; 生活環境が大きく変わった場合は、落ち着きをまつことが大切; 便を塗れば親に叱られるのを分かってやっているのは、それによって何かを訴えている。そのメッセージをつかむこと。

(3)食育の課題: 1)2歳児、ミルクやおかゆ程度、甘い物たべず、レパートリー広がらない。

出された意見: 盲ろうの場合、いたずらに何でも口に入れてしまうよりも、逆に安心で適応的。もし健康に大きな問題ないのであれば、焦らずに、じっくりと。

(4)コミュニケーションの課題: 1)コミュニケーション獲得のプロセス、コミュニケーション手段について; 2)サインを使用しているが、量が本人に適しているかわからない; 3)泣くことで現在表現していることがあるが、どう接したらよいか。

出された意見: 信頼関係が基礎であること; その人と共にいたいと思える関係づくり; 一人ひとりに適した手段がかならずあること。

(5)係わりについて不確かであるという課題: 1)まだ未定頸盲ろうの子どもをはじめて担当し、何から手をつけてよいかわからない。

出された意見: 介助を必要としている幼い盲ろう児に係わるとき、かならずその子に分かりやすい触覚的な予告を丁寧にしてから介助をすること; 子どもが好む活動を保護者から聞き、その活動を子どもが体の動きや表情で求めやすいようにかかわる。コミュニケーション手段はかならず適したのものがあること。

この他、盲ろうの子どもの聴力検査、人工内耳についての情報、学習内容の長期的な目標と見通し、周囲のクラスメートの中で一人で待たされてしまうことが生じたときの配慮等の課題も出されましたが、話し合いは上記の生活リズムとコミュニケーションについてが主となりました。

(文責:中澤 恵江)

盲ろう児者の活動

参加者...盲ろう児者5名+兄弟2名

ボランティア 1日目5名 2日目7名

今年度の保育は、昨年に比べて盲ろう児生の参加が少ないことが予想されましたが、開催間際に加え、当日の参加があったりして、結果的に5名の盲ろう児生とその兄弟が2名の参加が得られて、にぎやかに楽しく活動を終えました。手伝ってくれたボランティアは、昨年同様教員、研究者、学生、研究所職員などで、本当に助けていただきました。感謝です。

保育の様子を少し報告させていただきます。

第1日目

当初予定していた参加者が、交通渋滞に巻き込まれて、遠い久里浜になかなかたどり着けず、結局最初は二人だけの活動になってしまいました。

ボランティアには自分のネームサインであるアクセサリーを手に着けてもらい、盲ろう児者に触ってもらうことを説明して開始しました。盲ろう児者は、手をギュッと握って挨拶をし、最初は緊張も見せて、涙も見せていましたが、ボランティアの巧みなコミュニケーションで徐々にリラックス。やがて、久里浜養護学校のプールをもう魚のように泳ぎ回ったり、ちょっとお風呂みたいな温度のプールに入って、本当に気持ちよさそうでした。プールが終わった頃ようやく着いた他の盲ろう児者と、明日の活動を楽しみに一日目は無事終了。

第2日目

2日目の午前中は、昨日と同じプールをし、午後からおやつをかねてフルーツポンチ作り、最後は研究所のプレイルームで、遊ぶことにしました。二日目になると、昨日の緊張がどうかと心配したのですが、ネームサインを触り、ボランティアが確認できたり、簡単な触手話や触指文字で、会話をしてそれが伝わって自分をコントロールする姿に嬉しく思いました。

プールでは、水かけが、バトルに発展するほどほどでしたが、活発に遊びを満喫しました。

フルーツポンチでは、差入れていただいたスイカを器にして、高級メロン、ブドウや桃など季節の果物が盛りだくさんのフルーツポンチでした。みんなで果物を触ったり、臭いをかいだり、包丁で切ったりという活動をして、ようやく作り上げました。隣で行っている分科会の参加者にもあげたり、昨日お世話になったボランティアの先生も持っていたりして、みんなでにぎやかに食べました。美味しかったな。

最後にプレイルームで遊びましたが、思い通りにならない気持ちが、爆発する場面もありましたが、その気持ちをきちんと話をしながら納める姿に昨年度とは違った成長姿を目にすることも出来ました。

やはり、盲ろう児者の活動はこの盲ろう教育研究会の一番楽しい分科会です。来年もやりたいと切に思います。みんなまた来年また会おうね。ボランティアの皆さん本当に有り難うございました。

筑波技術大学における盲ろう学生の教育・日常生活支援の研究 盲ろう学生の受け入れに向けて

岡本 明
(筑波技術大学)

佐藤正幸
(筑波技術大学)

中澤恵江
(特殊教育総合研究所)

1. はじめに

筑波技術大学は日本で唯一の、視覚障害、聴覚障害のある学生だけのための高等教育機関であり、盲ろうの学生の受け入れも使命として担っている。しかし盲ろうは視覚・聴覚の障害が重複しただけのものではなく、単に両障害についての個別の知識や教育ノウハウだけでは十分な受け入れはできない。

平成16年度、視覚・聴覚に障害(最重度の聴覚障害と進行性の視覚障害)を併せもつ学生が本学に入学した。そこで我々は、この学生に対する教育・日常生活支援の方法および今後の盲ろう学生の受け入れについての研究を、筑波技術大学の競争的教育研究プロジェクト事業の助成を受け、国立特殊教育総合研究所との共同プロジェクトで行なった。本稿では本学で実際に行なってきた支援活動及び今後の盲ろう学生受け入れ、支援に関する提言について報告する。また、これに関連して2006年6月に開催した「視覚・聴覚重複障害(盲ろう)学生支援に関するシンポジウム」および、本学での盲ろうの人への支援技術研究の一部について報告する。

2. 学生のプロフィールと本人に対する支援

平成16年度入学の男子学生。最重度の聴覚障害があり、人工内耳を装着している。併せて進行性の視覚障害で、視力0.4、夜盲、視野狭窄がある(アッシャー症候群)。本学入学直前に本人及び家族からの話で、聴覚のみではなく視覚にも配慮が必要であることが判明した。本人に対しては、そのニーズを引き出しながら次のような支援を行なった。

- 寄宿舎の居室変更
- 夜間の歩行訓練(寄宿舎-共用棟)
- 懐中電灯の選定
- 段差のテープ(黄色)の設置
- 講義演習時の支援
- 街灯の設置(寄宿舎-共用棟)

3. 盲ろう学生の受け入れ、支援等に関する提言概要

プロジェクトでは、本人への支援試行とともに、以下の提言をまとめて大学に提出した。

- (1) 大学としてのポリシーの確立、方針の決定、体制の整備
- (2) 在学生の実態把握
- (3) 受験希望者、受験生への支援の拡充
- (4) 在学生の重複障害の早期発見と適切な対応
- (5) 環境整備(寮、学内、校舎)
- (6) 支援機器整備・情報保障の確保

(7) 授業方法への工夫

(8) 日常生活訓練の実施体制確保

(9) 教員、学生の理解の促進

(10) 適切な就職、進路指導

(11) 卒業生フォロー

4. 視覚・聴覚重複障害(盲ろう)学生支援に関するシンポジウム

2006年6月28日に、筑波技術大学で標記のシンポジウムを開催した。これは本プロジェクトの成果報告として本学の取り組みを紹介すると共に、盲ろうに関する講演、研究発表を行ない、広く盲ろうについての理解を求めめることを目的としたものである。開催に当たっては本学内だけではなく広く盲ろう関係者や近隣住民にも呼びかけ、学外からの約30名を含めて80名ほどの参加者があった(うち盲ろうの方4名)

<第1部 報告と講演>

(1) 視覚・聴覚重複障害学生支援プロジェクトの経緯、成果、提言(本学障害者高等教育研究支援センター 佐藤正幸、岡本 明)

(2) 障害学生サポートとプライバシー保護の接点(本学保健管理センター 深間内文彦)

(3) 視覚・聴覚重複障害(盲ろう)について～「盲ろう」をめぐる世界の動きと日本の動き～(特殊教育総合研究所 中澤恵江)

(4) 盲ろう者の立場から(東京盲ろう者友の会理事 藤鹿一之)

(5) 企業における盲ろう者の立場から(卒業生から)～重複障害者として会社生活で苦労した事、重複障害者として社会に訴えたい事～(三菱自動車 筑波技術短期大学機械工学科平成7年卒 高橋雄一)

<第2部 研究発表>

(1) 盲ろう支援のための振動子による周囲環境情報伝達(障害者高等教育研究支援センター 岡本 明、三好茂樹、保健科学部 坂尻正次)

(2) 視覚障害者及び盲ろう者向けコミュニケーション端末 DB4DB の提案(保健科学部 小林 真)

(3) 盲ろう者支援機器の研究(保健科学部 坂尻正次)

(4) 体表点字の開発(保健科学部 佐々木信之)

5. 今後の展開

上記の「提言」を具体的に実施に移していく。そのために「盲ろう学生の教育・日常生活支援の研究プロジェクト」を再度立ち上げる。